

Daisuke NAGAI's Lecture and Talk-Session

「パパ、お祭り楽しかったねー!」息子の言葉はまちづくりの原点

自分のまちで仲間ができた永井さんが、まちを楽しい場所にしていくために新たに目をつけたのが、イオンタウン守谷の敷地内にあった「ヒマラヤ杉公園」だった。

「いわば民間が管理しているパブリックスペースですが、草がボウボウに生えていて、ジャングルのような状態でした。ただ、そこなら、マーケットが開けたりするのではないかと考えたのです」

まずはイオンタウン守谷の担当者とP-playersのメンバーで、キックオフのミーティングと称する「飲み会」を開いてビジョンを共有したり、その後はマーケットの開き方を岡山県まで学びに行ったり、草刈り機を持つ地元民の力を借りたり、パパ友が手伝ってくれたり、いろいろな準備や出会いを経て、2019年5月にヒマラヤ杉公園でのマーケット「and PARK Moriya」を開催した。

コンセプトは「『住みよいまち』から『自ら暮らしを楽しむまち』へ」。

地元で人気のピザ屋さんや花屋さん、アクセサリーや雑貨の作家さんなどにそれぞれ直接出店を依頼し、それまでになかったにぎわいを生み出した。

「イオンタウンの駐車場の一角に、昼からワインが飲めたり、楽しみに子どもが走り回れるような空間ができ、来ていただいた方に喜んでいただけました。そして、イベントが終わり、撤収をして疲れ果てて家に帰ったのですが、昼間に来ていた3歳の長男が『パパ、今日のお祭り楽しかったね!』と言ってくれたんです。この言葉は本当にうれしく、胸に刺さりました。そして、まちづくりってそんなに難しいことではなく、こういうことではないのかなとも感じました。大きな一歩でした」

「and PARK Moriya」はその後、2か月に1回のペースで定期開催されるようになった。

宝物はすぐ近くにある。ここからは冒頭で紹介



左・中／永井さんが地域のまちづくりに関わるきっかけとなった「誰でもパーク」。右／イオンタウン守谷の駐車場内にある公園を会場にした、まちとつながるマーケット「and PARK Moriya」。コロナ禍後は開催をいったん休んでいる。

「住みよいまちなのに、なにか物足りない?」

永井さんが暮らす守谷市は東京都心から約40キロ圏内にあり、都心へのアクセスもよく、人口は今も増加傾向にある。民間のコンサルティング会社のアンケート調査で「住みよいまち街ランキング」の1位に選ばれたこともあるまちだ。

「公私混合」の話になっていく。私はイオンタウンの社員ですが、今は本社勤務で、イオンタウン守谷での活動は組織内の枠組みを超えて勝手にやったようなかたちになりました。社内ではいろいろな言われることもあったのですが、実際に「and PARK Moriya」をやってみて、暮らしと仕事はばらばらにするのではなく、本来どちらもつながっているものじゃないかと考えるようになりました。すべては私たちの未来へつながっていくことなので、公も私も積極的に混ぜていこうと思うようになったのです」

その後、まちづくりにつながる仕事としては、千葉県佐倉市にあるイオンタウンユウカリが丘で、地域のまちづくり会社やハンドメイド作家と連携したシェアアトリエ「ふわいえ」を開設したり、埼玉県ふじみ野市のイオンタウンふじみ野に自社のコミュニケーションスペース「cotokoto」をオープンさせたりした。cotokotoにはキッチンやレンタルスペース、ワークスペースなどが併設され、今では子ども向けのワークショップやコーヒーの淹れ方教室などが開かれている。

また、千葉県旭市では、自治体と地元事業者とともに公民連携を進める「生涯活躍のまち・みらいあさひ」プロジェクトや、多世代交流施設「おひさまテラス」の計画が進行中だという。



イオンタウンふじみ野にオープンしたまちのコミュニケーションスペース「cotokoto」。

そしてプライベートでは、守谷市内で築40年の空き家を新たに借り、リノベーションして家族と暮らす。

「自由にリノベーションさせてくれる空き家物件を探していたのですが、それもP-playersの仲間の力を借りて見つけることができました。『はじめの一歩』をがんばって踏み出すと、仲間の輪が広がっているいろいろなことができるようになっていきました。自分の暮らしがこうなったらいいなあ、ということを思い浮かべながら、身の回りを探せば、宝物は近くにあります。まちづくりに興味があるなら、勇気を持って一歩を踏み出してみてください。そんなメッセージで、永井さんは講演を締め括った。



開催日
2021年9月4日

永井 大輔さん

(イオンタウン株式会社 新業態推進本部 兼 地域連携まちづくり委員 / 一般社団法人P-players理事 / 特定非営利活動法人 自治経営 関東甲信越アライアンス副代表)

Report
第8回

Theme

ネットワークと
はじめの一歩



フェーズ2の最後(通算第8回)の講演&トークセッションのゲスト講師は永井大輔さん。ご自身曰く「普通のサラリーマン」の永井さんは、本業の仕事とは別に、自分が暮らす地域のパブリックスペースを活かすことなどに取り組む。

やがてその地域活動が、本業の仕事ともリンクするようになり、公私混同ならぬ公私混「合」の精神でより多角的にまちづくりに関わるようになった。「まちのための活動は自分たちの未来の生活につながる。自分にも家族にも、会社や地域にもよいことになるのなら、仕事もプライベートも関係なく、積極的に混ぜていこう!」という思いがそこにあるという。

だれでも「はじめの一歩」を踏み出すことで、その人自身も、その人が暮らすまちの未来も変えていけることを示す講演を、茨城県守谷市の自宅からオンラインで行った。

ただ、永井さんはその「住みよいまち」とされる評価に実感が伴わなかった。「都心へのアクセスのよさのほかにも、道路が広かったり、公園も多いなど、暮らしやすく、たしかにいいまちです。私が勤務するイオンタウンが運営する『イオンタウン守谷』という大型ショッピングセンターもあって買い物も便利です。でも、暮らしていて豊かだな、楽しいなと感じるかというとなにか物足りなさを感じていました」と話す。

そして、縁があつて「都市経営プロフェッショナルスクール」という社会人学校で都市経営や公民連携のまちづくりを学んだ後、地元・守谷で「一歩」を踏み出すきっかけとなったのが、自宅の近所の公園で開催されていた「誰でもパーク」だった。

「誰でもパークは、まちの公園にタープを張って誰でも自由に座れる場所をつくったり、コーヒースタンドを出したりする小さなイベントです。守谷の住民で結成された『一般社団法人P-players』が開いていました。家の近くの公園でやっていたので散歩がてら見に行ってみると、変なおじさん(笑)がコーヒーを淹れていて、でもちょっとステキで、普段見ている公園がちよっと違った場所に見えてきました。それまでに感じなかった豊かさを感じたのです。それで、その次の回からは運

みんなが持っている「パブリックマインド」の活かし方

永井さんの講演後、高橋さん、菅原さんを交えたオンライン・トークセッションが行われた。

高橋：地域の住民たちが草の根活動的に行っていたことがSC(ショッピングセンター)とつながっていく事例など、とても興味深かったです。ただ、どんな活動をするにも、その地域でどんな人がいるのかを知ったり、いっしょにやってくれる仲間探しが大切なのですが、どのようにすればいいでしょうか。

永井：新型コロナ感染症のことさえなければ、飲みに行くのが一番早いです(笑)。こんな人がいておもしろいよとか、どこそでこんなことをやっているよという情報も聞けたりします。ただ、もちろん飲むだけで何かが生まれるわけではありません。「飛び込んでみる」ことが重要です。

気になる地域イベントなどがあればそこへ行き、ちょっと運営の手伝いをしてみたり、裏側を見せてもらったりすると、一歩踏み込んだ人のつながりができていきます。

高橋：調布市は都心から約20キロ圏内、守谷市は40キロ圏内ということで、その距離の違いでもコミュニティのつくられ方は変わってくると思いますが、守谷ならではのコミュニティのスタイル、また調布との違いで何かお感じになることはありますか？

永井：守谷市では2005年につくばエクスプレスが開通し、利便性が上がって、新しい住民が増えました。なので、住み始めて年数が浅い住民もたくさんいます。また、守谷市には商店街らしい商店街がないのです。私は2015年から住み始めたのですが、最初の頃は都心で働き、守谷はただ寝に帰る場所という感じでした。ただ、お互いに比較的新しい住民ばかりなので、裏返すと、フラットな関係で何か新しいことができる「余白」があることは感じています。

一方、調布を走る京王線はTXよりも歴史が深いですね。調布には商店街もあるでしょうし、すでにいろいろな「資源」や人のつながりがあるという強みがあると思います。アプローチの方法は違いますが、それぞれのまちの楽しみ方はあると思います。

話はちょっと変わりますが、まちづくりの進め方で「公民

連携」がありますが、その「公」は必ずしも官(自治体など)だけではなくてもいいのでは?と、仲間と話したりしています。民間が「パブリック(公)」的な役割を担うことがあっていいと思います。

菅原さんが富士見町で地域に開かれている「FUJIMI LOUNGE」はまさにそういう役割の場所なのではないでしょうか。そういう場所が増えていくと、まちが変わっていくと思います。

菅原：FUJIMI LOUNGEのことに触れていただき、ありがとうございます。私も同意見で、民による公共的空間の運営に興味があり、重要だと思っています。ただ、やはり経費もかかります。地域で何かを始めたい、「はじめの一歩」を踏み出したい人は多くいると思うのですが、お金のことや、その活動を継続させるためのアドバイスはありますか。

永井：継続のためには、やはりリスクは少なく始めるのがいいと思います。例えば、仲のいいカフェの方と一緒にコーヒーのテントを一つ出すだけでもいいと思います。そこでコーヒーセミナーをやってみるとか。

菅原：たしかにそれなら、自分が持っているキャンプ用品のイスやテーブルを出すだけでできるかもしれませんね。

永井：私の場合はP-playersがあったのでそれなりの規模でできましたが、なくても自分でできることで始めてみるのがいいと思います。

誰でもそれぞれ、パブリックマインドは持っていると思います。自分が暮らす半径数百メートルくらいのエリアに対し、どんなまちであってほしいかと考え、その実現のために行動する権利も義務もあると思います。

菅原：調布市の空き家施策担当の松元俊介さんからもオンラインで質問が来ています。空き家を活用したまちづくりの取り組みを、地域の方に広く知ってもらうために効果的と思うことがあれば教えていただきたいということです。これは私も知りたいです。

永井：多くの方に知ってもらいたいのであれば、地域にある普通のショッピングセンターなどが意外と効果的です(笑)。ピラやチラシを置いておくと、結構、手に取って

ってくれたりします。あとは人通りが多いところでのサインージ(ディスプレイの広告)などもよく見られます。ただ、広くは伝わりますが、関心の深さにはつながりません。そういう意味では、一番いいのは口コミですね。つな

がりの中で人が増えていくのが理想です。ちょっとでも興味を持っている方がいれば、「一度、見に来てください」と誘って、現場を見てもらうのがもっとも効果的だと思います。



ここがポイント!

調布市の未来への活かし方

(イオンタウンという)大手のディベロッパ一にお勤めの永井さん、そして、ご自身が住まわれている場所を楽しい地域にしたという永井さん、仕事とプライベートを分けるのではなく「公私混合」してしまえばいいのだ、というお話にこれからのまちづくりに役立ついろいろなヒントをいただきました。

フェーズ2の一連の講演では、永井さんをはじめ、ゲスト講師のみなさんが「楽しむ」というキーワードを挙げていました。公共性のある場所を「民」が楽しみながらつ

くっていく。公共性というと、生真面目に考えてしまいがちですが、その公共性を「おもしろがってみる」ことが大切だと感じました。

また、「小さく始める」「地域を巻き込む」「少しずつでもいいのでファンを増やし、持続的な収益を上げる」ということも共通して出ていた言葉でした。まちの「つながり」プロジェクトの最終年度、「富士見町チャレンジショップ」ではそういった学びを活かした地域の居場所づくりに挑戦していきたいと思っています。



高橋大輔さん